

濟州島の言
語の古くか
ら他地方と
戀つて居た
こと

一六 濟州島の方言と傳説

一

濟州島はもと耽羅^{タムラ}といひ、一箇の獨立國であつたと稱せられて居る。該島は絶海の孤島で、古來交通の便が少なく、自然に孤立するやうになつたのであるが、今日でも言語風俗などの朝鮮半島地方と違つたものが多く存して居る。而して其

の言語が、古くから朝鮮の内地とどれ程違つて居たかといふことに關しては、海東釋史に

「嘉祐中崑山縣上海有一船、桅折風飄抵岸、船中有三十餘人、衣冠如唐人、繫紅鞵角帶短皂布衫、見人皆慟哭、語言不可曉、試令書字亦不可讀、行則相綴如雁行、久之自出一書示人、乃唐天授中告授屯羅島首領陪戎副尉、又有一書乃是上高麗表、亦稱屯羅島皆用漢字、蓋東夷之臣屬高麗者、船中有諸穀、唯麻子大如蓮的、云々。」（少談）

按屯羅即耽羅也

とあるのでも略々推知することが出來よう。又魏志馬韓の末節に

「又有州胡、在馬韓之西海中大島上、其人差短小、言語不與韓同、皆髻頭如鮮卑、但衣韋好養牛及豬、其衣有上無下、略如裸、勢乘船往來市買中韓。」

とあるが、州胡とは果して何島を指すのであらうか。或は濟州島などを意味して居るのではあるまいかとも思はれる。

二

今日の濟州島方言

(イ) 무사, 그영, 을염, 삭가.

(웨, 그리케, 흙넛가)

(口) 현저감보라.

(ハ) 닥서기^하나, 닥쿠^다.

(어서, 가보아라)

(ニ) 시나^셔나, 설너^버려.

(잇던지, 업던지, 그만 두어라)

(ホ) 무슨 거^하젠, 이^영하^영유.

(무엇하^라고, 이러케^하오)

以上上段の文は何れも濟州方言を其の儘に書き記したもの(括弧内はそれに對する京城語)であるが、始めて之を見た人は、恐らくは朝鮮人でも其の意を了解するに苦しむであらう。余は大正元年十一月方言調査の目的を以て該島に旅行し、音韻、語彙、語法、其の他の事項に關して調査を遂げたことがある。其の詳細に就いては當時某雜誌に之を發表したことがあるから、今は全く省略する。該島言語に關する根本的研究の如きは古來何人によつても企てられたことが無かつたのは、甚だ遺憾に感ぜられるのであるが、古く朝鮮人によつて其の一部分の現象が觀察發表せられたといふことは、頗る興味ある事實として之を歡迎し、且つ感謝せねばならぬのである。それは東國輿地勝覽、濟州牧の條に、村民、俚語、艱澁、先高、後低とあり、耽羅志、風俗の條下に

俚語艱澁（村民俚語艱澁先高後低、金淨風土、綠土人語音、細高如針刺、且多不可曉、州記謂多不音、以京爲四那、以藪爲高之、以岳爲元音、謂爪爲蹄、謂口爲勒草、觀謂之、其音類如此）

などある、其の例である。併しながら「先高後低」といひ「語音細高、如針刺」といふ、果して何事を意味するものであらうか。そは恐らくは音節、語句、文等に於ける音調を特筆明記したものであらうと思はれる節が無いでもないが、今日の該方言の音調を以てしては何等の類似点をも見出し得ぬのである。

三

余は方言調査の傍ら、到る處古老に就いて各地の傳説を採集し、其の種類三十に及んだ。而して之を内容上から觀察すると、該島の開闢説、龍蛇に關する傳説、暴風に關する傳説、漂流に關する傳説等に分類することが出来る。就中琉球との關係を物語るものなどは、歴史家の參考となる点も少なからぬことと信ずる。今此等の中の重なるものを逐次紹介する。

（一）濟州島開闢説

往時本嶋未だ人類無かりし時、三人の神人が地中より湧出した。長を良乙那、仲

を高乙那季を夫乙那といふ（一説には高乙那が長、良乙那が仲、夫乙那が季となつて居る）。或る時三人が東海の濱に出で遊獵を試みて居たが、紫泥を以て封じた木製の函が流れて來た。取つて之を開けば、中に石製の函あり、紅帶紫衣の使者もそれに隨つて來た。さて其の石函を開き見るに、中から青衣の處女三人と駒犢や五穀の種子などが現はれて來た而して其の使者曰く「我は日本國の使者である。我が王此の三女をまうけたが、西海の中岳に神子三人あり、國を開かんとすれど配匹無きを悲しめる由を聞き、此の三女を送りて我をして隨はしめたのである。宜しく配を作し、大業を成し遂げよ」といつた儘、使者は雲に乗じて姿を消した。二人は年齢の順序で此の三女を娶り、良地を卜して居所を定め、始めて五穀を播き、駒犢を牧養して、本嶋の鼻祖となり、爾後益々富を致すに至つた。

以上は「東國輿地勝覽」に出て居る記事であるが、巷間の所傳には多少相違した點もある。そして其の湧出したといふ地は今も濟州城外南方數町の所にあつて、之を三姓穴（三姓の湧出した穴であるとして極めて淺い小）又は毛興（三乙那が興つた所といふ義、三乙

を一字に書け」と稱して居る。此處ばかりは老松林を成して何となく尊嚴の氣に
ば毛字さなる」と稱して居る。此處ばかりは老松林を成して何となく尊嚴の氣に
打たれる。側らには「三姓穴」(崇禎年間)と刻した碑や、「徒内王子、星主高氏三昆弟埋
安所」(同治十年)と刻した碑などが立つて居て、今日も春秋二季盛大なる祭祀を
行ひ、本嶋唯一の靈域と尊崇せられて居る。又三女が上陸した東海の濱とは旌義郡の
東海岸なる溫平(餘乙溫ともいふ)であると傳へられて居る(溫平は古く延婚といひ
婚の義である。即ち日本國より三女を迎へた地であるといひ億へられて居る)。又此の傳説に關係して濟州邑東方一里に
三射石といふものがある。これは高良夫三人が君臣を定めんとせる時、碑に矢を
射て、其の最も成績の優れたものが君となり、次位者が臣となり、更に其の次が民
となることを約した。然るに其の成績は高良、良夫の順序となつたので、高は君とな
り、良(後に梁と改む)は臣となり、夫は民となつた。碑に立つた矢の跡が今でも残つて居
るといふが、固より信するに足らぬ。此の事は「輿地勝覽」にも「矢射石、在州東十二里、
古老傳云、三姓卜地時所射、至今射跡猶在」と書いてある。

本傳説は新羅昔脫解の卵生傳説等と共に朝鮮側に於ける日鮮關係記事の重
なるもので、上古に於ける日鮮兩民族の同源又は交通の密接なりしを物語る貴

重の資料といふべきである。

(二) 金寧窟の蛇

濟州邑東方五里なる金寧海岸に大なる窟がある。昔其の中に大きな蟒が居て、土人は毎年歳首酒食を供し、處女を犠牲にして祭祀を營んだ。若し處女を犠牲に供せぬやうな事があれば、風雨忽ち起り、何時止むべしとも見えなかつた。時に徐憐なる年若くして膽力ある一判官(今の郡守の如きもの)あり、此の事を耳にして頗る遺憾となし、或年部下數十を率ゐ、各人に槍刀を持たせ、又薪炭、焰硝を備へしめて、其蟒を退治せんとした。祭祀半にして果して蟒顯はれ、將に處女を噉まんとした。待ち構へた徐憐は槍で其の蟒を刺し、部下は之を亂打して窟内より引き出し、火中に投じて燒棄したが、其の腥きこと夥だしく、到底之に近寄る者が無かつた。徐憐は急遽單騎にて城内に逃れ來つたが、背後より一道の青氣襲ひ來り、彼が役所の後方に達した頃、遂に其の青氣の爲めに追ひつかれ、あへ無き最期を遂げた。併し其の後蟒の災禍は公く止んでしまつた。

右は我が素盞鳴尊の大蛇オホヘビ退治の傳説と共通の點があるやうに思はれる。而し、

て此の傳説に就いては他に一二の異説があるやうである。今参考のため之を次に掲げることとする。

(イ) 金寧窟に蛇が居た。年々一處女を犠牲にして祭祀を行はねばならなかつた。郡守は之を憐み、終に其の蛇を殺した。然るに其の後郡守は蛇の祟により病床に臥し、復た起つ能はざるに至つた。郡守即ち遺言して「余死せば多くの蛇襲ひ來りて余を咬み盡すべければ、死體の周圍には盛んに火をおこし、之に近づくこと能はざらしめよ」と。斯くして郡守は幾くもなくして死んだが、其の遺言の通り葬式を営んだため、多數の蛇が襲來しても、遂に死體を如何ともすることが出来なかつた。

(ロ) 金寧窟に蛇が居た。年々一少女を犠牲にして祭祀を営まねばならなかつたので、郡守が之を憫然に思ひ、其の蛇を殺さうとした。其の時郡守が「余が蛇を打殺さば必ずや多數の蛇が襲來して余を咬み殺すであらう。それで今余は壺の中に入つて其の禍難を避けよう」とて、其の蛇を殺し、自分は壺の中に這入つたが、多くの蛇の來ぬうちに、壺中で息絶わてしまつた。

(三) 漢羅山上の蛇

昔時本島の人六十歳に達すれば、誰彼の區別なく其の家人に伴はれて漢羅山に上り行き、其の頂上なる平石の上に坐らせられ、將來は仙人になるやうにと、盛饌を供へて祭つたさうである。祭事終れば家人は老人を其の儘置き去りにして歸宅するのであるが、翌日になると何時でも老人の影は見なくなつてしまつた。或時一人の役人があつた。其の父も年正に六十に達したので、之を同伴して郡守の宅に暇乞に行つた。郡守は其の祝として一襲の衣服を贈り、それに石雄黄と糊とを混ぜ合はせた藥を塗布してやつた。役人は之を貰つて漢羅山に赴き、例の如く祭事を營んだが、妖雲忽にして四方より起り、父はそれに包まれて其の姿を失つてしまつた。そこで役人は郡守の許に行き、其の顛末を物語つたが、郡守は役人に向つて、「明日山上に行き見よ。必ず奇異なる事あるべし。」といつたので、役人は命の儘翌朝山上へ行つて見ると、驚くべし、祭壇の側らに一つの大きな蛇が死んで居た。役人は自分の父の姿が見なくなつたのは必定此の大蛇に吞まれたのに相違あるまいと思ひ、其の蛇の尾を割いて見たら、果して父の死體が現はれて來た。而して其の後は蛇の災禍が全く止み、役人も厚く其の父の菩提を弔つた。此の

琉球太子來

葬儀が仰々本島に於ける葬式の濫觴であると言ひ傳へられて居る。

(四) 琉球太子來る

李朝光海辛亥の歲、琉球の太子が濟州島に漂着し(或云、琉球王が一夜海中の島を夢見て一人の王子を生んだ。其の王子、成長後、其の島を發見せんとして多年心膽を碎いたが、終に其の濟州島なるを知り、此處に來た)竹西樓(今日山地浦から濟州城内に入る所に、水流があつて橋が架せられある。竹西樓は其の附近にあつたと傳へられて居る。)に上陸した(或は濟州城東方なる砂羅岳。時の帥臣李珪(或は牧使)太子の所持せる珍寶に目眩み、遂に之を竹西樓に殺害せんとした。太子は之を知り、自ら指頭を咬み、竹西樓の板を取り、次の如き詩を血書した。)

堯語難明桀服身

臨刑何暇訴蒼旻

三良入穴人誰贖

二子乘船賊不仁

骨暴砂場纏有草

魂歸故國弔無親

竹西樓下滔々水

長帶餘怨咽萬春

此の血書の板が海中に流れ去つて、終に琉球に漂着した。琉球人之を見て大い

に驚き、竹西樓の所在を探したが、終に其の濟州島にあることを知つた。爾後琉球人の濟州人を惡むこと最も甚だしく、常に仇敵の如く怨んで居た。濟州人も之を憚り、以後琉球人に遭へば、自分等は康津又は金海の人間だと言つて、直言すること avoided といふことである。

五 金兵房の漂流

金兵房(兵房は役名)なるもの、嘗て乗船して海上に出たが、颶風に遇つて日本の無人地に漂着し、幸にして其の漁夫に救はれた。然るに間もなく復々大風に遇ひ、安南國に漂着した。然るに適琉球の女林春香なるものが安南に來て居て、金兵房と同宿して居た。ところが兩人は段々相思の仲となり、終に父の許可を得て結婚し、やがて日本に聘せられて高官を授けられた。然るにまた琉球の使臣に林春榮といふものあり、以前から日本に行つて居たが、此の時に至り、春榮が實に春香の甥に當つて居ることを知つたのである。そこで三人が一度琉球に歸つて見ようといふ事になり、其の歳に歸國した。而して其の翌年約束通り、又日本へ歸還したが、其の途に濟州島の沖合を通つた。然るに金兵房は遙か海中に聳ゆる漢羅山を見て戀

々の情に堪へず、如何にかして上陸して見たいとの願望を起した。そこで一案を案出し、かねて船中に備へつけて來た水甕を密かに破壊し、人々の水に渴せるを好機として、水汲入れを名として船を大靜郡大浦に着けさせた。上陸するや否や、金兵房は仲間を見捨て、闇を侵して自家に駆け込んだが、丁度其の日は自分の行衛不明になつた命日に當るといふので、家人は其の祭事を營んで居た。金兵房は今日迄の來歴を物語つて、自分が偽者でないことを話したけれども、家人は中々聞き入れさうもなかつた。そこで金兵房は詳しく家譜を語り、又妻が兵房の左臂を斃して辛うじて眞の金兵房たることを知り、大いに喜んだ。船中に置き殘された琉球人等は上陸して金兵房の引渡しを迫つたけれども、家人は之に應ぜず、却つて兵房の着物を死罪人に着換へさせ、死罪人の着物を彼等に與へてやつた。琉球人等は已むを得ず日本に歸つたが、流石の金兵房も其の妻を懷ふの情に堪へず、時々海岸の丘上に立つて、日本の方を望み、其の妻を偲んだといふことである。これも内地の松浦佐用姫まつらさようひめの領巾振山のうきんふるやまの傳説に似た点がある。

右の外兎山（旌義郡）、龍潭（濟州郡）、廣靜堂（大靜郡）等に於ける龍蛇傳説、牧使李衡

群に關する暴風雨傳説、徐福の本島通過傳説など數へ來れば尙ほ幾十種もあるが、本篇では其の主なるもののみを掲ぐることにした、